

氏 名 小河 久志

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1468 号

学位授与の日付 平成 24 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 周辺イスラームのダイナミズム—タイ南部村落におけるイ
スラーム復興運動と宗教実践の変容—

論文審査委員 主 査 准教授 林 勲男
教授 田村 克己
准教授 白川 千尋
教授 西井 凉子 東京外国語大学
准教授 信田 敏宏 国立民族学博物館

論文内容の要旨

本論文の目的は、タイの宗教マイノリティであるムスリム（タイ・ムスリム）の宗教実践が、国家やイスラーム復興運動といったイスラームをめぐるマクロな外的諸力に包摂されるなか、いかに変容しているのか、その様態について記述し、考察することである。ムスリムの日常の様々な側面にイスラームの介入を進めるイスラーム復興運動は、1979年のイラン・イスラーム革命を契機に、中東をはじめとする世界各地で展開してきた。タイにおいてもこの動きは、海外からのイスラーム系団体の来訪等を通して、国内全域で見られるものとなっている。他方、タイでは政府が、様々な対イスラーム政策を実施してきた。その結果、公的な支援と承認を受けたイスラーム行政機関とイスラーム教育機関が、国家から村落に至る幅広いレベルで誕生した。このように、タイ・ムスリムを取り巻くイスラームをめぐる状況は近年、錯綜したものとなっている。それは、彼らの宗教実践にも様々な変化を引き起こしている。

こうしたなか、東南アジアのイスラームを扱った人類学的研究は、ムスリムのミクロな宗教実践の変化を分析する際に、それを包摂するマクロな外的諸力として主にイスラームの制度化を図る国家に注目してきた。このため、イスラーム復興運動は、国家と比べてムスリム社会に及ぼす影響力を矮小化される傾向にあった。また、タイ・ムスリム研究は、外的諸力がムスリムの宗教実践に及ぼす影響をほとんど考慮しないか、その影響を加味してもムスリムの宗教実践を一面的に捉える傾向にある。

以上を踏まえて本論文は、タイ南部トラン県に位置するムスリム村落 M 村を事例に、タイ・ムスリムの宗教実践の様態を、それが生起するローカルな文脈とともに、イスラーム復興運動を中心とするイスラームをめぐるマクロな政治的、社会的な動きに連携させて考察した。具体的には、ムスリムの宗教実践を、イスラームの規範をめぐる解釈、実践と定義し、それが表出する場としてイスラーム復興運動団体の宣教活動、イスラーム教育の現場、民間信仰の儀礼という村における日常の生活領域を取り上げた。その際、宗教実践をめぐる村人の関係性や上記 3 領域間の関係性、マクロな外的諸力のあいだの関係性といった横の繋がりにも注目している。また、本論文では、2004年にスマトラ島沖で起きた地震による津波災害と、政府や NGO などが実施した復興支援が村人の宗教実践に及ぼした影響についても考慮に入れた。

第二章では、トランスナショナルな宣教活動を展開するイスラーム復興運動団体タブリーグを取り上げ、その概要とともに、それへのタイ・ムスリムの対応について、M 村の事例から明らかにした。M 村においてタブリーグは、公的宗教機関であるモスク委員会との連携に代表されるローカルな要因や、タブリーグに対するタイ政府の寛容な姿勢などのマクロな要因が連関することで、1990年代以降、広く村人の支持を集めた。しかし、その一方で、タブリーグの宗教的な正当性をめぐり村人のあいだに多様な解釈、実践が生まれた。その様子は、村人の認識上に「ダッワ・グループ」、「古いグループ」、「新しいグループ」という実体化されない住民範疇が誕生したことからも読み取れた。また、タブリーグをめぐる村人の関係は、連携や相補など対立に限られない錯綜した様相を呈していた。

第三章では、M 村におけるイスラーム教育の拡充の過程を明らかにした。1990年代以降、村のイスラーム教育では、タブリーグやイスラーム教育普及団体クルサンパン協会、

教育省といった外部機関の関与が強まった。モスク付設の宗教教室は、タブリーグの宣教活動を授業に導入したり、教育省からの支援を受け入れたりするなど、これら外的諸力と巧みに連携することで多くの村人の支持を集めた。他方、古くからクルアーンの読誦法を伝えてきた私塾は、外的諸力と一線を置き旧来型の教育を続けた結果、その規模を縮小させた。しかし、同塾は、既婚女性をはじめモスク宗教教室の対象から外れる村人を受け入れるなど、イスラーム教育に対する村人のニッチなニーズに対応することで存続した。以上のように、村人のイスラーム理解は進んだが、上記の2つの宗教教育機関の関係者のあいだに、各機関が教授するイスラーム知識や機関そのものの宗教的な正当性をめぐり対立する解釈が生まれた。そこには、タブリーグをめぐる彼らの解釈も深く結びついていた。

第四章では、1978年にタブリーグが来村する以前と以降の時期を対象に、船霊、ターヤイ、アルアという超自然的存在に対する村人の信仰実践の変化を明らかにした。1970年代以前のM村では、イスラームは来世、民間信仰は現世を司るものとして相互補完の関係にあった。しかし、タブリーグの伸展やイスラーム教育の拡充等にともない、民間信仰はイスラームの規範に反するとする解釈が広まり、旧来の信仰体系を維持する者の数は減少した。他方で、ドゥアアの朗唱というイスラーム的行為やジンやアルアなどタブリーグも認めるイスラーム上の存在を取り込みながら民間信仰を新たに解釈、実践する者が現れた。そこにおいて民間信仰とイスラームは、相反するものではなく、一貫した信仰として実践されていた。

第五章では、インド洋津波に被災した後、村人が宗教実践をどのように変化させたのか、その諸相を明らかにした。津波による甚大な被害やタブリーグの積極的な宣教活動等を通して、津波後、アッラーに対する村人の畏敬の念は深まった。その結果、モスクで礼拝する者が増加するとともに、アッラーへの願掛けやタブリーグが宣教に使ったビラが護符化するなど、新たな形の宗教実践が誕生した。他方で、民間信仰をめぐる村人の宗教実践のあり様も津波後、大きく変化した。たとえば、船霊や村の土地神ト・セへの信仰は、津波前の時点で衰退傾向にあったが、津波を契機に再興した。以上の現象は、「イスラーム化」と「復古化」と呼びうる2つの異なる動きをとっていた。こうした津波後の宗教実践をめぐる錯綜した状況は、過去の津波災害を克服し、未来の津波災害を避けようとする村人の切実な試みととらえることができる。それはまた、アッラーに献身するだけでは満たされない村人の心理的状況を反映した行為でもあったとも言える。

本論文で取り上げたムスリムの宗教実践において、民間信仰などの非イスラーム的な要素は打ち捨てられる傾向にある。しかし、その内実は多様であった。たとえば、民間信仰は、タブリーグの中心メンバーらから放棄される一方、他の村人によって様々な形に解釈、実践されながら存続している。そこにおいて彼らは、タブリーグ等が説くイスラームを参照したり、それを取り入れたりすることで、自身の宗教実践をイスラーム的に「正しい」と見なしていた。村人の宗教実践は、自身の置かれた社会的文脈のもとに彼らが見せた「正しい」イスラームの表現であり、「正しい」ムスリムであることの表明の場でもあったのである。

本論文では、南タイというイスラーム世界の周辺におけるムスリムの宗教実践に注目し、その動態を描いてきた。それは、イスラーム復興運動や国家政策、自然災害を経験するなかであらわれたイスラームと民間信仰、外的諸力が持ち込んだイスラームとローカルなイ

スラーム伝統のあいだの対立や相補、連携といった相互関係の総体であり、またその再編の過程でもあったのである。

本論文は、タイの宗教マイノリティであるムスリムが、国家やイスラーム復興運動といったマクロな外的諸力に包摂されるなか、いかに宗教実践を変化させているかを描いたものであり、それによってタイにおけるイスラームの動態を明らかにしている。論文の基礎となるのは、申請者があしかけ6年にわたりおこなってきた、タイ国南部のムスリム村落およびイスラーム復興運動の支部や行政機関での人類学的調査によって得られた資料である。

論文は全部で6章から構成される。第1章序論では、人類学的イスラーム研究、東南アジアのイスラームについての人類学的研究、タイ・ムスリム研究の3つに分けて先行研究を概観している。そして、これら先行研究のとらえ方が、マクロな外的諸力かミクロな宗教実践のいずれかに偏ることを批判し、本論文では両者の接合や、外的諸力間及び日常生活領域間のつながりにも注目して、ムスリムの宗教実践の総合的理解を目指すことを述べる。

続く第2章では、トランスナショナルな宣教活動を展開するイスラーム復興運動タブリーグを取り上げ、その概要とタイにおける活動の実態、そして調査村落において、その活動をめぐる住民の対応について明らかにしている。この村においてタブリーグは、モスク委員会との連携等もあって、広く村人の支持を集めるのに成功するものの、イスラームの規範を参照した宗教的に正しい行為をめぐり、住民の間に多様な解釈が生まれており、それによる対立や協働などの錯綜した関係を考察している。

第3章、第4章では、教育と民間信仰という日常生活のそれぞれの領域において、タブリーグという外的諸力が調査村にどのような変化をもたらし、いかに多様な解釈や実践を生み出してきたかを論じている。すなわち、イスラーム教育においては、国家やタブリーグ等の外的諸力の関与が進み、教育内容や機会が拡充し、村人のイスラーム理解が進んだ。そして、その習得する知識が多様化するとともに、知識やそれを教授する機関の宗教的な正統性をめぐって対立する解釈が生じていることを述べている。他方、民間信仰は、タブリーグの浸透やイスラーム教育の拡充のなか、反イスラーム的であるとの解釈が広まり、旧来の信仰を維持する者は減少する一方で、イスラーム的な要素を取り込むことで、新たな解釈や実践が現れたことを的確に描写している。さらに、それらを通して、イスラームと民間信仰の間の対立や相補、連携といったダイナミックな関係を考察している。

以上のような調査村における宗教実践に、大きな再編をもたらしたのが、2004年12月のインド洋津波災害である。本論第5章では、この津波の被害と復興支援、それらによってもたらされた村落社会の変化を述べるとともに、新たに生まれた宗教実践について詳述している。それは、唯一神アッラーへの願掛けや宣教ビラの護符化という、イスラームの信仰実践と現世利益との結びつきであり、民間信仰のイスラーム化と復古化が同時に進展するという現象である。こうした津波後の宗教実践をめぐる錯綜した状況は、再度の津波来襲による被災を回避しようとする試みの結果であり、同時にアッラーに献身するだけでは満たされない心理状況を反映したものであると考察している。

第6章の結論では、マクロな外的諸力の影響のなかで、個人のミクロな宗教実践に多様な変化が生じており、それぞれの実践主体にとっては、イスラームの規範を参照したも

のとして、個々の実践はイスラーム的に「正しい」行為であると解釈されていることが述べられている。すなわち、イスラームの規範のうちから、ローカルな伝統に対応した規範を選択的に採用し、それをもって「正しい」行為の裏付けと解釈しているのである。そして、これら宗教実践の変化は、外的諸力が持ち込んだイスラームと、ローカルなイスラーム伝統の間の対立や相補、連携といった相互関係の総体であり、その再編の過程でもあったと結論づけている。

本論文のまず評価されるべき点は、イスラームの規範的側面を踏まえつつ、それとムスリムの置かれた社会的状況と結び付けて研究を進めていることにあり、このことから、イスラームの動態を明らかにすることが可能となっている。そして、これを実現しているのは長期のフィールドワークで得られた緻密なデータであり、その基礎となっている調査地の人々との良好な信頼関係の構築ともども、高く評価される。さらに、イスラーム復興運動の従来の研究の多くが、その組織や活動の紹介にとどまるのに対し、本論文は村落におけるムスリムに視点を置いた貴重な研究であり、活動の実態を詳細に描いていることは、このテーマの研究の今後の発展にとって大きな貢献となっている。

申請者が現地調査中に遭遇したインド洋津波は、この論文の内容に大きな関わりを持つ出来事であったが、それを論文中に取り込み、さらに、詳細な記述と周到な分析をおこなっていることは、この論文の問題設定の適切さと、申請者の研究の確かさを示していると判断する。さらに進んで、村落レベルにおいて災害と宗教を結びつけて論じているのは、貴重な視点である。また、論文の議論は論理的かつ実証的であり、十分な一次資料の提示をふまえて分析手法も明快であり、丁寧な記述ともども、高く評価されるところである。

その一方で、ここで扱っている調査村の例がどこまで一般的なのか、イスラーム復興運動をめぐる村人自身による分類範疇が社会関係や経済関係等とどのように関わるのか、行為と言説をめぐる村人の態度など、一層の考察を求められる点も指摘しうるが、それらは、本論文で詳細に示された個別の事例がより広い比較への可能性を持つゆえである。例えば、村落レベルにおけるイスラーム教育の記述など基本的なデータを提示しながら、本研究は、調査地住民と海外のムスリムとの交流や、その結果としての調査地への影響などのトランスナショナルな現象をさらなる研究の視野に置いており、今後の展開が期待されるところである。

以上を総合して、審査委員の全員一致で、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値すると判断した。